

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34 京都橘女子大学図書館 田北十生気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

「ゆりかもめ」を、会員の交流広場に！

「ゆりかもめ」参加者 21 名に！

「ゆりかもめ」メーリングリストのアドレス

yurikamome@kuee.kyoto-u.ac.jp

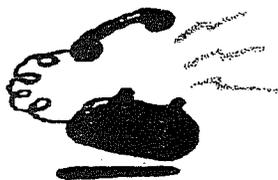
「ゆりかもめ」加入者が5月12日現在で21名になりました。

支部別加入者でみると、当然ながら京都支部が最も多く15名、東京支部3名、大阪支部2名、福岡支部1名です。

ところが、実際の投稿といえば、閑古鳥もびっくりで、鳴きやむことがないといっています。これじゃかわいそうと支部委員会で論議の結果、支部委員会の報告をはじめ、委員がまず積極的に投稿しましょうということになりましたが、加入者のみなさんの積極的投稿をお願いします。会員の交流広場として、気軽に投稿して下さい。お待ちしております。

また、加入条件があるのにまだ加入されていない会員のみなさんも、どんどん加入登録をされますようお願いします。

「ゆりかもめ」も加入状況でもわかるように全国的広がりを見せています。単に京都支部会員の交流というに止まらないということは、非常に良いことだと思います。が、京都支部のメーリングリストですので京都支部会員のみなさんに親しまれるものにしたいと思っています。



| | |
|----|---------------------|
| 目次 | 「ゆりかもめ」を会員の交流広場に…1頁 |
| | メーリングリストについての資料2つ |
| | 京都研究集会にむけて……………2頁 |
| | 大図研京都支部研究集会の日程……7頁 |
| 次 | 第8回支部委員会の報告……………7頁 |
| | 連載小説(7)リュウ……………8頁 |
| | 数珠つなぎ(27)……………10頁 |

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付(京都橘女子大学

☎ 075-574-4118 FAX 075-574-4124

♥ kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp 田北まで

メーリングリストについての資料2つ 京都研究集会に向けて

澤居紀充

京都大学における新しい図書館業務システムの導入とワーキンググループの活躍ぶりについて、6月の研究集会で報告することになっていますが、その前宣伝もかねて何か寄稿を、との要請を受けていろいろ思案しましたが、時間もないことであり、ここではメーリングリストについての資料2つを紹介し、責めを果たすことにしたいと思います。

資料1。新図書館業務を準備するワーキンググループの活動と各職場を結びつけるメディアとしてメーリングリストが効果をいよいよ発揮しはじめたとき、増加するメールについて「メール攻撃はたまらない」とするメールが出され、議論を呼びました。このときの各種見解を整理し、メーリングリストに配信したものです。

資料2。新年度に入り、大幅な異動があり、ワーキンググループも再編されたのを受け、メーリングリストの新しい活用について提案したものです。

(資料1)

Eメールを図書館職員共同の道具として

1998年2月12日 澤居紀充



1) 「メール攻撃」との批判

・1月下旬に「毎日毎日メール攻撃たまりません」「他の仕事ができせん」との批判が、Eメール管理者と世話人によせられた。新システムの運用がはじまり、これから本格的にEメールの活用が期待される時期の批判であり、よい機会なので、Eメールについて考えてみたい。

・批判の要旨ー毎日毎日メール攻撃たまらない。目録入力等の連絡事項は正式なルートで文書でほしい。又は必見のものを、もれなく周知させる方法を考えよ。現在のメーリングリストは「公のもの」のように使われているが、100%加入ではない。意見交換の場としては有意義だが、この方式だけで重要な通知が届くのは不安。

2) 目録WGにおける意見交換

・このメールを受けて、目録WG内や、目録メーリングリストでもいくつかの意見が出された。

1 目録メーリングリストの現状についての見方

- ・「メール攻撃」というほどの量か。いまやメールなどは一般的になっている。
- ・メールがやっと普及したと思ったら今度は多すぎるというのは皮肉なこと。
- ・量が多すぎるというが、いろいろな情報が入って来るので大変重宝している。
- ・大半の情報は関係ないが、情報が公開されているおかげで、疎外感を感じずに待機できる。今後他の業務システムもこのようだと安心。
- ・メールやホームページなどを通して全体や各図書室の動きが如実に把握できて非

常に心強い。

- ・遠隔地の上、図書系掛長のいない部局として、メーリングリストやホームページが始まって、ずいぶん助かる。もっとほかの業務にも広がればと思う。
- ・時間雇用で教室の図書室をまかされていると、時間がとれず、メーリングリストもなかなか読めない。
- ・一人職場というところは、教室の図書業務への不理解の著しい場所と認識。メール上の余裕ある発言、私もやってみたいもの。ずいぶんご立派なお仕事をなさっていらっしゃるみなさんのお言葉に、ヤル気をなくす。
- ・小さい図書室からの苦情や不満が特に目立つ。京大の組織論に根本的な問題があると思う。しかし対症療法的にも解決方法を探らないといけない。
- ・「攻撃」という表現に同感しないでもない。メールの内容(質)のばらつきが激しく、実際の量以上に読む負担が大きく感じられる。
- ・基本的にメールというものは、その場限りのもので、メーリングリストを蓄積情報源として使うことには無理がある。
- ・メーリングリスト加入者が増え、書き込みも多くなり、第1段階(普及宣伝期)から、第2段階(運用方針確立期)への転換を迎えているのではないか。
- ・業務上の連絡事項とその他は、区別する必要がある。

2 解決方向をめぐる意見

- ・メールを正式手段と確認すること。
- ・メーリングリストを「目録業務連絡用」と「意見交換用」の2つ運用。業務連絡用は、部局端末連絡担当者は必須、それ以外は加入を推奨。理・工については、各図書室で誰かが加入。意見交換用は、任意加入とし、多数の参加を推奨する。重要案件は、当該会議で文書にする。
- ・2つのには賛成できない。良い情報を2つのメーリングリストに流す必要があり、2つに参加している人は、同じ2つのメールをもらう羽目になる。
- ・業務連絡用の最終的な正式手段は「目録業務連絡」ホームページとし、蓄積情報源として使用する(今、そうなっている)。
- ・メーリングリストは速報・リアルタイムな連絡手段と、目録WG活動報告用として位置づける。
- ・書き込みの内容は、公共性のある質疑応答や情報提供とし、主題は原則として、目録業務とシステム関係の具体的なものとする。個人宛てメッセージで済むものは個人宛てメールで。

3) 新システム(目録管理業務)準備におけるメーリングリスト活用の経過

1 開設と意義づけ

- ・1997年8月下旬に、附属図書館小川恭弘氏を管理者として、kucat-mlを開設。次のように意義づけた。
 - a 次期システム(目録)についての意志疎通を職場の隅々まで徹底する。
 - b ネットワーク環境を肌で感じることによって、次期システムについてのアイデアを生み出す条件をつくる。

- ・その通信内容は、通報、質疑応答、提案、討論など、とした。
- ・発足の手順として、調整グループに報告・了解を得、メールアドレスを持っている目録関係者に「メーリングリスト開設のご案内」（9月2日）を送り、加入をよびかけた。また学内図書系職員の連絡用ホームページに、加入案内を図入りで掲載した。

2 「メーリングリストの効用」配布

- ・9月29日に開かれた第2回目録担当者交流会で、「メーリングリストの効用」を配布し、加入をよびかけた。
- ・ここでは、一般的にメーリングリストを説明するとともに、目録メーリングリストの効用として次の4点をあげている。
 - a 次期システムを準備する共同空間を実現。
 - b 事態の進行が、ほとんど同時進行でつかめる。
 - c 意見や感想、質問などを自由に発言できる。
 - d 一方通行ではなく、対話的、円卓会議的におこなえる。
- ・また「目録メーリングリストをより効果的にするために」として次の3点をあげている。
 - a 目録関係者の大多数が加入する。
 - b メンバーは常時「開封」してメールを読む。
 - c 積極的に発言（発信）して共同財産をふやす。

3 メーリングリスト拡大の提案

- ・次期システムを準備するワーキンググループ全体に、メーリングリストを拡大するよう調整グループに提案した（10月13日）。その内容は、次の3点である。
 - a 管理者：WGの中に担当者をきめ、調整グループで確認する。
 - b 方式
 - ・全図書系職員対象に1つだけ開設し、「書き方」に基準をつくる。
 - ・各WGが個別に開設し、職員の自主的判断で、いずれかに加入。複数加入も可。この場合の運営は、各WGが責任をもつ。
 - c 新システムの安定稼働へ、常に総括を繰り返していく。

4 部局端末担当者会議（略称「部端」）としての位置づけ

- ・再開された部局端末担当者会議（略称「部端」）でkucat-mlを連絡用に有用なものと位置づけ、加入が推奨され、12月10日に開かれた全体説明会で紹介された。これ以後端末担当者の加入がすすみ、ほとんど全部局を網羅することになった。

5 本番稼働後の加入者と発信数の増大

- ・2月初旬、加入者は142人、発信数は300に近づいている。これまでの主な通信記録は、目録業務連絡ページ
<http://campus.kulib.kyoto-u.ac.jp/staff/cat/cat.htm>
で読むことができる。
- ・使われ方の特徴としては、業務上の質問と回答が圧倒的多数を占め、他に目録WGの活動連絡、図書館活動の紹介と批評、職場の経験交流などである。

4) メーリングリストを図書館職員共同の道具として

1 情報公開と言論規制

- ・ 目録メーリングリストは、新システムの準備に当たって、全学の図書館職員の共同をつくり出すためには情報公開が必須のもの、との認識に立って始められた。しかも各WGの自由闊達な活動が組織的に保証されたもとの、ホームページの編集とともに、大いに各人の創意工夫が生かされてきたといえる。
- ・ これに対して、情報の多さを否定的に受け取り、なんらかの制限を加えようとするのはその主張者の置かれた事情は理解できるとしても、言論規制待望論に陥る危険があるとおもう。

2 参加者の主体性確立

- ・ 情報公開は、主体性ある個人を育てる。情報量の多さにひるまず、積極的に立ち向かって自己の価値判断をください努力をすべきではなかろうか。

3 図書館づくりにおける共同とメーリングリスト

- ・ 長期間にわたる定員削減政策と大学院重点化を中心とする「大学改革」によって、京大の図書館組織がさまざまな矛盾、問題をかかえている。そこに新システム導入という業務の大変化が加わり、問題点がよりあきらかとなった。
- ・ 他方この新システムの準備において、全学の図書館職員の協力共同が実現してきたが、これは現在の問題を克服し、京大における図書館づくりについての探求をすすめるための力となりうるものである。そしてこの共同の強化にとって、メーリングリストは大きな役割を果たすことができる。

4 運営上の新しい工夫

- ・ 今回のメール論議を生かし、メーリングリスト運営に工夫をこらす。
 - a 情報量が増えたといっても、現在の発信者数は、加入者総数からみて、まだまだ少ない。したがって基本は、「気軽に、大いに語り合う」ことに置き、積極的な発信意欲を殺ぐような制約はもうけない。
 - b それを前提として、発信形式に読みやすさの工夫をする。
 - c 業務上の重要な連絡事項やマニュアルは、メールと同時にホームページに蓄積し、公開する。

5 新環境の実感と今後の展望

- ・ 図書館職員が新しいネットワーク環境を活用して日常業務をすすめ、図書館づくりの方向についても効果的に議論することに習熟していくなら、京大における図書館活動を新しい段階にひきあげることになるだろう。

(資料2)

◇フォーラム◇

発信日：1998年5月8日(金)

発信者：澤居紀充（目録WG）

<メーリングリストの新しい活用のために（試案）>

京都大学図書館職員をメンバーとするメーリングリストkucat-mlは、新図書館業務システムを準備する上で、大きな役割を果たしてきました。iLiswaveのすべての単位業務が本番稼働に入った現在、このメーリングリストの新しい発展が期待されていると思います。

先日の小川恭弘さんの、金沢からの提起に応じて、その活用方向について私なりに考えてみました。

1) メーリングリストの経過

1. 第1段階（1997年8月～12月）開設から目録業務本番稼働開始まで

- ・WGの活動とすべての職場を結びつける有効なメディアとなる。
- ・参加者がネットワークを実感的につかむ契機となる。
- ・「部端」メンバーの加入により、参加者の幅が広がり、目録業務にとどまらない役割発揮の条件ができる。

2. 第2段階（1998年1月～3月）本番稼働初期

- ・iLiswaveの全職場的な点検、機能チェックに威力をしめす。
- ・時々刻々の状況変化に対応する鮮度の高いホームページの編集と情報の蓄積という裏打ちを得て、メールに安定感、信頼感が加わる。

3. 第3段階（4月～現在）相互利用メーリングリストkuill-mlの発足

- ・kucat-ml以外にkuill-mlが開設され、複数のメーリングリストが存在することになる。
- ・同時にホームページも豊富化。



2) 問題点をあえてあげると・・・

1. 参加者がまだすくない。現在160名余。
2. 参加者に偏りがある。附属図書館や閲覧系が少ない。
3. 発信者がまだ少ない。
4. 内容が狭い業務関連に限られがち。
 - ・メールの普及時期に、メールの増加をとらえて「メール攻撃」とする批判があり、その後自由な発信が少なくなる。
5. 議論的コミュニケーションが少ない。

3) 新しい活用のために

1. kucat-mlの内容の豊富化

- ・業務連絡： 業務に関する質問と回答、経験交流、会議等のお知らせ
- ・インフォメーション： いわゆる「行政資料」の基本的情報（情報公開の対象）、各人が得た「耳より」な情報
- ・フォーラム： 図書館や大学をめぐる問題についての提案と討論

- ・図書館ライフ： 多様なテーマの小エッセイ、新任者の自己紹介やあいさつも
- 2. 参加者の拡大
- 3. 閲覧系メーリングリストの開設、またはkuill-mlを閲覧系のmlと位置づけ、すべての図書館員がどれかのmlに参加)

以上「フォーラム」第1弾として提起しました。

(京都大学附属図書館情報サービス課 さわい・のりみつ氏)

大図研京都支部 研究集会の日程

日時 6月20日(土) 12:30~17:00
会場 芝蘭会館(東大路通りバス停「東一条」下車すぐ)
内容 検討中(京大図書館新システムの取り組みについて)
関連記事を5月まで連載しますので、注目を!

第8回支部委員会の報告

【報告事項】

1. 第4回全国委員会 5月10日(日)
2. 会員情報
3. 財政情報
4. 「ゆりかもめ」運用状況(登録者数など)

【審議事項】

1. 支部報について
 - 1) 5月号について 研究集会記事(澤居氏)
 - 2) 6月号について 支部総会議案書/研究集会関連記事
 - 3) 7月号について 研究集会報告
 - 4) 8月号について 研究集会感想
2. 支部総会(7月17日 京大会館)について
 - 1) 議案書
 - 2) 準備
3. 第6回大学図書館員京都研究集会(6月20日)について
 - 1) 内容
 - 2) 今後の日程
4. 次回支部委員会 1998年6月4日(木)



*支部委員会の内容は、事務局長大館氏よりメーリングリスト「ゆりかもめ」でも報告されています。



リュウ

作 西田 治

追いだされた美穂は、ブツブツ言いながら、私の足を枕にした。漫画を見ながらヒッヒッと妙な笑いをする。

やがて、圭子がたまりかねたように「うるさいなあ、静かにしろ」といったが、美穂は全く聞こえなかったように、一層大きな声で体中を振るわせて笑った。

「お前、わざとやってるな！」

圭子は、起きあがると美穂の頬を軽くつねった。

「ああん！お母さんがいじめる」と、今度は私の肩に乗ってきた。

「うるせえなあ！全く。静かにしろよ。洋子を見る。静かなもんだ。」

「美穂が悪いんだからしょうがないじゃない。」

「違う！美穂じゃない。この漫画がおかしいんだもん。お母さんも読む？」

「いらん！あっちへ行け」

「お母さんこそ、あっち行ったら。美穂の場所取ったんだから・・・」

「どうでもいいけど、人の体をおもちゃにするなよ」

「じゃ、何処かえ連れて行ってよ。せつかくの日曜日なのに、あんたが新聞なんか読んでゴロゴロしてるからよ」と圭子は、私の尻を思い切り叩いた。

そんな訳で私たちはドライブに出かけることになった。リュウにとっては、初めてのドライブなので驚いたのか、嬉しいのか後部座席で大暴れした。美穂もつられて騒いだ。淳一は自転車で友達と出かけていたので、洋子が一人で留守番である。さぞかし、のんびりした気分になっていることだろうと、ふと私は思った。

次の日からリュウは、ドッグフードではなく、人間様と同じ食事を与えられた。リュウは、「これだ！これ！」と言った顔でうまそうに食べた。

それから何事もなく1ヶ月程が過ぎた日曜日、いつも喉を鳴らしてくる洋子が何故かやってこなかった。

「美穂、洋子知らない？」とテレビを見ている美穂に声をかけた。美穂はテレビから目を離さず「二階でねんねしてる」といった。新聞を読み終わって、二階に上がってみたが、どの部屋にも洋子はいなかった。窓を開けるとさわやかな風が入ってきた。

美穂が上がってきたので、「いないじゃないか」というと「そこ！」と美穂のおもちゃ入れの箱を指さした。私はおもちゃ箱をのぞき込んで「どこ？」といった。美穂はおもちゃ箱のおもちゃをかき分け、「ここ！」と言って指さした。洋子は人形やぬいぐるみの動物と一緒に、横たわっていた。私は、洋子をそっと持ち上げた。ところが洋子の頭が垂れ下がって揺れたのである。私は恐怖にもためまいを感じた。

「死んでるじゃないか！一体何をしたんだ！」

私は思わず怒鳴ってしまった。美穂はそういう私を不思議そうな目で見つめていた。

(次号へ続く)

(*10頁からの続き)

ようになり、ゲームは負け無しになった。結構面白いが、ストレスも相当なもの。毎晩遅くまでパソコンに向かって試行錯誤していると、体は疲れるが神経は高ぶり、不眠と食欲不振が続く。が、ワーキンググループの一員としては、私は何の役にも立たなかった。

宇宙人のような若いコンピューターの達人の中で、私はまるでシーラカンスだ。目録業務なら慣れていると自負していた自信が脆くも崩れる。目録の仕事はどうシステム化するか、業者とやり取りしながら細かく決めて行くのが当面の仕事だが、解らないことばかり。宇宙語の飛び交う会議は私にとって苦痛あるのみ。その上、メンバーの中で私一人だけがメーリングリストに入っておらず、学内便で必要情報のコピーを送ってもらっていたが、情報が洩れたり遅れたりして、話について行けない。予め文書でもらった会議時間が、その後メールで訂正されたり、また、研修に備えてこれこれの資料を持って来るようにメールで知らされたりする時、私だけが情報洩れで知らなかったりすると、つい、うっかりされただけなのに、まるで意地悪されたような悲しい気分になってしまう。物忘れ、思いこみ、聞き違いは今に始まったことではない。

京大の新システム構築に大きな成果をもたらしたものに、メーリングリスト方式があるが、私が出足でつまずいたのはまずこれだった。当初、医学部にはメールサーバが無く、ようやく私がアドレスを獲得したのは年が明けて新システムが稼働し始めた後だった。最も情報を必要とする人間が最も必要な時期にそれを手にし得なかったのが痛手だった。勿論、澤居チーフをはじめ中心的役割を果たした若手の優秀な方々を責めるつもりは全く無い。解りの鈍いオバサンに対して、彼らは終始根気よく親切に教えてくれたし、彼らは日夜をわかつた、本当に献身的にこのシステム構築に関わった。誰かの個人的な悩みに応えるより、そうした人のために一日も早くシステムを仕上げ、解りやすいマニュアルを作り、研修させ、慣れさせることに力をそそぐのが先決である。

と、解っているのは頭だけ。これまでの自分自身や仕事の自信は脆くも崩れ、劣等感や自己嫌悪や疎外感の中に突き落とされる。私の出来の悪い頭と体のコネクションはついに破綻を来し、ある日突然心臓の脈が狂い始めた。上室性頻脈不整脈の始まり。8月半ばから10月半ばまで、二月もの間それは続き、何度救急病院に夜中に駆け込んだか知れない。「まあ、すぐに死ぬことはないでしょう」と医者が言うので、仕方なく3週間職場を休んで、ひたすら本を読んで暮らした。体重が3キロ減って、ダイエットの効用もあったので、痩せたい人には絶好のシステムでもある。

とまあ、色々あったが、システムは私の定年退職時どころか、予定通り1月6日から本番稼働し、死ぬ程の思いで苦しんだこの私でさえ慣れて、片言の「宇宙語」で人とも話が出来るようになった。目録の入力は断然簡単になり、殆どマウス操作だけで、あっという間に検索も典拠や所蔵リンクも貼れる。ILL業務も本番稼働し始めた。雑誌業務もその内稼働するだろう。仕事は合理的で便利になったが、大学や国の物の考え方はひっくり返っているから、職場は相変わらず「定員削減」と「改革改組」の嵐の中で人が辞めても補充は無く、仕事はますます増えて忙しく、このシステムのおかげで仕事が楽になるのはまだ先のことであろうし、図書館職員が働きやすい職場作りはまだまだ頑張る必要がある。当分私は「仕事が楽なん、どうぞ」と言いながら定年を待つことになりそうだ。(終)

